The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>辻村優英著『ダライ・ラマ 共苦の思想』
Author(s)	髙瀨, 顕功
Citation	宗教と社会貢献. 2016, 6(2), p. 71-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57812
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

辻村優英著
『ダライ・ラマ　共苦の思想』
ぷねうま舎、2016 年 3 月 23 日、四六判、260 頁、2,800 円（税別）

髙瀬顕功*

1.　本書について

ダライ・ラマは世界でもっとも有名な僧侶の一人である。これを否定する人はいないだろう。ダライ・ラマが訪日すればニュースで取り上げられ、その言語録は書店で平積みにされていることも多い。日本の僧侶で、これほどまでにその言動がニュースバリューを持ち、社会的影響力を有する人がいるだろうか。では、ダライ・ラマとはいったい何者なのか、その思想とは何であろうか。

本書は、ダライ・ラマの思想の源泉にある「共苦（ニンジェ）」に焦点をあて、「近代」との関係性の中でその思想がいかに示されてきたかを描いた一冊である。本書のキーワードとなる「共苦」は、チベット語の snying rje（ニンジェ）にあたり、ダライ・ラマ自身は compassion と英語で表現している。通常、compassion の日本語訳は「慈悲」であるが、著者の辻村氏は、あえて「共苦」という語句を用い、「慈悲」ではとらえがたい「他者の苦を苦しみ、他者が苦しみと苦しみの原因から離れるよう欲する」（pp.1-2）というニュアンスに焦点を当て、その思想をとらえようと試みている。

また、本書は、辻村氏が 2009 年に京都大学へ提出した学位請求論文がもとになっている。膨大な資料に裏打ちされた堅実な学術書でありながら、的確な比喩表現によって専門外の読者を置き去りにしない配慮も施されている。その内容は思想のみに留まらない。導入部（第一章）において、チベット仏教の基礎概念から歴代ダライ・ラマまでを押さえることで、ダライ・ラマのチベット仏教史の中での位置づけも示されている。したがって、背景を把握したうえで、宗教、政治、科学、環境などの「近代」に対するダライ・ラマの言説を読み直すことができるという点でも広い読者層を想定した良書といえよう。

ただし、評者はチベット仏教思想を専門としているわけでもなく、ダラ

* 大正大学地域構想研究所 BSR 推進センター助教 a_takase@mail.tais.ac.jp

イ・ラマをめぐる種々の研究に通じているわけでもない。以下に本書の構成と内容を紹介し、若干のコメントを記すが、門外漢ゆえいささか的外れなコメントとなるかもしれないことをお許しいただきたい。なお、本書評中で、特別の説明なくダライ・ラマと記述するところは、化身制度上の概念である「ダライ・ラマ」ではなく、テンジン・ギャムツォという個別具体的な「ダライ・ラマ 14 世」のことだと理解していただきたい。

2. 本書の構成と内容

本書は終章を含め、全八章からなる。その構成は、第一章の「ダライ・ラマ概論」、第二章から第五章までの「近代化とダライ・ラマの思想」、第六章および第七章の「『共苦』を可能にする論理とその展開」という 3 つのパートに分けることができよう。

以下に目次を紹介し、各章の内容を簡単に押さえておきたい。

はじめに　「共苦」と近代―ダライ・ラマ思想の源泉
第一章　ダライ・ラマ十四世とは誰か？
第二章　共苦の宗教思想
第三章　共苦の政治思想
第四章　共苦の科学思想
第五章　共苦の環境思想（自然・社会）
第六章　共苦の贈与論
第七章　共苦の応答
終　章　理想と現実のはざまで―欲望・自由、そして共苦

第一章では、ダライ・ラマを生み出し、育んだチベット仏教について概観している。

「ダライ・ラマ」の名を受け継ぐ人物が、チベットの宗教と政治両方の王として君臨するのは、「化身」というあり方によって生物学的な死を超越し王権を継承してきたためである。著者は、カントローヴィチの「王の二つの身体」理論を参照しつつも、時空を超え「想像の共同体」の核として機能するためには自然的身体や政治的身体ではとらえられない「宗教的身

体」という理解が必要であるという。また、1959 年の亡命を機に、ダライ・ラマが展開する活動・思想が、チベット仏教文化圏を超え、広く国際社会に波及することとなったことも述べている。

第二章では、亡命後、他宗教の実践者と対話を重ねる中で、ダライ・ラマの宗教観が、宗教多元主義へと導かれていくことが述べられている。

しかし、ここでいう宗教多元主義とは、ジョン・ヒックの示す一極収斂的モデルではなく、宗教を必要としない人をも対象としたものである。

ここでは、「宗教」は特殊性をもつものであるが「スピリチュアリティ」は普遍的な性格をもつものとして区別され、宗教はスピリチュアリティを育む手段としてとらえられている。さらに、ダライ・ラマは、スピリチュアリティを「他者の助けになろうとする考え」といい、信仰の有無にかかわらず、こういった心の状態を持つべきだと主張する。また、これを「普遍的宗教」あるいは「普遍的チュゥ（chos）」と表現し、その中の重要な要素として「共苦」を据えている。

ここには、自身のバックボーンにあるチベット仏教の思想から普遍的要素を抽出し、仏教や宗教という枠組みを超えた概念で表現し直そうという意図があったと著者は解説する。

第三章では、ダライ・ラマの宗教観でみられた特殊から普遍への転換が、チベットの政治体制への見直しにも通じているということが示されている。

本章では、チベット政治制度を特徴づける概念として「宗政和合（チュゥスィ・スンデル）」という語が示される。その定義は、①宗教と政治の最高指導者を一人の人物が担う制度、②双方の最高指導者を一人で兼ねる必要はないが宗教の根本的な見解をもって政治を行う制度、③特定の宗教的見解ではなく、諸宗教に共通する価値である非暴力・平和の見解に基づいて政治を行う制度の 3 つの段階がある。ダライ・ラマは、「宗政和合」に関し、当初①であった見解を②へ、そしてさらに③へと概念を拡張し、チベットの民主化を推し進めていったとする。

また、③で示される「非暴力」は、他者の役に立つこと（積極的非暴力）と、他者を傷つけないこと（消極的非暴力）とに分かれるが、この根本は「共苦」にあるという。積極的非暴力は時として暴力という形をとり、他者に害を与えないという消極的非暴力と矛盾する可能性をはらんでいる。しかし、これも自己利益のためでなく、多くの他者の苦を最小化するため

であれば是認されるという。すなわち、教条主義的な暴力の排除は行わないという態度である。

もちろん、ダライ・ラマ自身は暴力の行使に関しては極めて慎重な姿勢を示す。それゆえに、チベット問題の解決に向けても非暴力を貫いている。チベットの完全独立を放棄した和平プランを中国側に提示し、平和的な解決を求めている。これは、手段として暴力を用いた場合に生じる最悪の結果を吟味したうえでの選択であり、共苦の思想が政治的判断の基準となっていることがうかがえよう。

第四章では、科学と仏教の類似性および相違点を示し、さらには共苦との関係性を述べている。

ダライ・ラマによれば、科学的探究における証拠や論理的一貫性などの検証プロセスは、仏教に通じるところがあるという。それは、権威を無批判に受け入れることなく、自らの経験（直接知覚）と推論によって吟味するという姿勢である。しかしながら、科学における知識獲得の方法が「観察（＝科学者の感覚）」と「理論（＝論理的推論）」に依拠するのに対し、仏教における認識手段は、「経験（＝直接知覚）」、「推論」、「信頼すべき権威」によるとし、3 点目の「信頼すべき権威」は科学的方法とは相容れないものという。また、仏教は、科学が扱わない／扱えない、経験による主観的な世界や価値もその探求の対象とすると述べられている。

一方で、ダライ・ラマは科学がもたらす功罪に目を向け、「おそらく一番大切なことは、共に生きる他者への感情移入という基本的な人間的感情から、科学が決して乖離しないようにすること」（p.118）という。著者は、「他者への感情移入」が共苦であり、この共苦は、突発的一時的な感情ではなく、原因から結果を予測する論理的感情と解説する。そして、方法論的な親和性を示しながらも、共苦の思想によって科学を方向づけなければならないと、ダライ・ラマの科学に対する見解をまとめている。

第五章では、環境に対する共苦の思想が描かれている。ここでの環境とは、自然環境と社会環境、すなわち人と自然との関係性、人と人との関係性ということができよう。

自然環境、とりわけ植物に関してチベット仏教では有情（心あるもの）とみなさない。ダライ・ラマの説く、共苦は「有情たちが苦とその因の一切から離脱するように欲すること」（p.157）であり、ここからすれば共苦を

向ける対象ではないと著者はいう。しかし、ダライ・ラマは植物の保護を訴える。この背景には、自然環境は、私たち「有情世間」を取り巻く「器世間」であるという認識がある。さらには、器世間は、有情の業によって形作られ、またそのあり様が有情の苦楽に影響するという。ゆえに、自然環境は共苦の思想による保護の対象であるというのだ。

では、社会環境としての人間関係はどうか。ダライ・ラマは、現代において、人は他者の幸福を重要視しなくなくなった結果、アイデンティティが欠如し、孤独感が生じているとみている。そして、その原因を、道徳的側面を欠いた市場主義経済システムに帰している。しかし、ダライ・ラマは、市場主義経済そのものの見直しを迫っているわけではない。そこに他者の苦しみに対する応答可能性としての「普遍的責任（Universal Responsibility）」を備える必要性を説く。ここで、著者は「普遍的責任」とは、「共苦に基づく積極的な行動」（p.169）と言い換えている。

第六章は、共苦が人間の本質であると示すとともに、本来私秘的な苦がもたらす他者との関係について述べられている。

ダライ・ラマによれば、共苦は仏教特有の概念ではなく、人間であるかぎり持ちうる心の質であるという。さらに、共苦は人間の本性であるので、いかに残忍な者であったとしても共苦に目覚め、共苦に満ちた人間に代わることができるという。

前述のように、共苦とは「有情たちが苦とその因の一切から離脱するように欲すること」である。しかし、苦は主観的な意識の経験であり、また、個々の人生の歩みによって生じた結果でもある。したがって、外部から観察しえない私秘的なものとして他者に共有されることはない。ところが、ダライ・ラマは、「感情移入」を通じて他者に対する共苦が可能であるという。これは、他者が苦しむ状況を目の当たりにした時に感じる「耐え難さ」でもあるという。そして、この「耐え難さ」を感じる基盤には、自他ともに幸福を欲し、苦しみを欲さないという「自他平等」の意識があるという。

著者は、さらに、共苦をポランニーの贈与の論理を援用して説明する。すなわち、自他間における苦の非対称性は「耐え難さ」という負い目となり、この負い目を解消するために「他者が苦から離脱するように欲する」というわけだ。したがって、共苦とは苦を中心にした互酬的関係における自己と他者との関係性ともいえる。

第七章では、共苦の思想をより広範な世界に適応させた「普遍的責任」という概念を紹介している。

本章で「普遍的責任」は、「普遍」と「責任」とに分けて説明されるが、そもそも、この概念は、現代の世界が密接な相互依存関係にあることに依拠している。すなわち、「普遍」とは、共苦の範囲を、私的な見解に基づいた敵味方の区別を設けない他者へ向けることであり、また「責任」とは、自発的な意思をともなう共苦であるという。すなわち、「他者が苦から離脱するように『私がなそう』」（p.215）とすることである。

これらは、仏教でいうところの「大悲」に相当する。したがって、この大悲の概念を、普遍的宗教の概念としてとらえ直したものが「普遍的責任」ということができよう。

さらに、第六章に示された共苦の贈与論的理解に基づけば、私的な区別を設けることなく他者との苦の非対称性に負い目を感じ、その応答としてその他者の苦を取り除こうという自発的な意思を持つことが普遍的責任ということができる。そして、たとえ、現実に苦を取り除くところまでいかなくても、受け入れがたい他者へ自身の関心を向け直し、苦から離れるよう望むことが普遍的責任の核心をなすともいう。

終章では、著者の研究動機が語られ、個人化が拡大した現代社会において前近代的共同体とは異なる社会統合の概念として共苦の持つ価値が示されている。現実社会でその人の置かれた状況、有する資源などにより共苦の完全な実践は難しい。しかし、この「できない苦しみ」にも共苦し、できる範囲で行うことの大切さを説く。おそらく、これはダライ・ラマの言葉を通して、著者がもっとも訴えたかったことではなかろうか。

3. 本書に対するコメント

以上、本書の内容を概観したが、紙幅の都合と、評者自身の能力の問題もあり、各章を的確にまとめられたかは心もとない。しかし、そのうえで、あえてコメントを記させていただく。

本書では終始「共苦」という思想が提示される。共苦の概念は「はじめに」の中で、「①他者が苦しむのを見るに耐え難く、②他者の苦を苦しみ、③他者が苦しみとその原因から離れるように欲すること」（pp.1-2）と示さ

れる。苦により焦点をあて、仏教的文脈に依存しないこの語句を用いることで、普遍的な心の質として「共苦」を描こうという意図は理解できる。

しかし、本書では共苦という概念によってこれまで看過されてきたダライ・ラマの思想を浮き彫りにするというような意図はない。あくまでも、ダライ・ラマの言説の源泉には共苦という思想があり、その共苦とは何かについて一貫して論じている。

では、なぜ compassion は「慈悲」では不十分で、「共苦」でなければならないのか。『岩波仏教辞典』によれば、「慈悲」は「慈（＝与楽）と「悲（＝抜苦）」に分けて理解される。このうち、「悲（＝抜苦）」は、他者の苦に同情し、これを抜済しようとする思いやりを表わすとされている。「抜苦」ではなく「共苦」を積極的に採用する学術的意図が示されていれば、なおこの語に対する理解がさらに深まったであろう。

また、著者は、ダライ・ラマが持つ共苦の思想が、宗教観、政治制度、科学への態度・見解などに結びついたとする。しかし、外在する社会的事実によって戦略的にその思想を変遷させていったと考えられなくもないだろうか。すなわち、亡命し、「近代」と出会うことで共苦の思想が形作られたとする見方である。本書を読んでそのような思いにとらわれた評者にとっては、それぞれの時系列及び社会的事実も併記されていると、いっそうダライ・ラマの思想に迫れるのではないかと感じた次第である。

とはいえ、これらの批評は本書の魅力を何ら損ねるものではない。英語、チベット語の膨大な資料を渉猟し、ダライ・ラマの共苦の思想に裏打ちされた宗教・政治・科学・環境に対する姿勢を丁寧に描き出したことは、もっとも評価されるべきところであろう。また、共苦が発動する論理を贈与論の観点から提示するという試みは大変興味深く、これが互酬性により達成されるのであれば、たしかに共苦は仏教的文脈に依存しない「普遍的チュゥ」として広く存在していることに得心がいく。

しかし、なによりも著者の学生時代の実存的な問いが本書の出発点にあったということを知ると、本書に込められたメッセージ性を強く感じることとなる。すなわち、アノミー化した現代社会の中において、共苦の思想によって他者との関係性、自己の存在意義を見出すということである。この想いにふれるとき、本書はまた違った魅力を放つ。まさに、学術書の枠を超え、現代社会に生きる人々にとっても示唆に富む一冊といえよう。

参考文献

中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編 1989『岩波仏教辞典』岩波書店。